こんなことを子どもたちに伝えたい大人もいる！
～今は微力でも～

第 23 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
2025 年 6 月 7 日(土)　於:渋谷商工会館

SPECIAL THANKS

事業助成
一般財団法人保安通信協会

ご賛助
　当会の活動にご賛助賜り深く感謝申し上げます。お名前の公表をご希望されておられない方々につきましても本紙面をお借りして心より感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

株式会社寿商会　株式会社 LOSA　有限会社ひでの工芸　木藤繁夫
株式会社幸栄企画　保険情報サービス株式会社　弁護士尾崎毅
弁護士中務嗣治郎　公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会
弁護士深澤直之　一般社団法人日本映像制作・販売倫理機構
株式会社読売新聞東京本社　TMB パートナーズ株式会社
杉並交通株式会社　日吉交通株式会社　政和自動車株式会社
つばめ交通株式会社　開進交通株式会社　昭栄自動車株式会社
宮園自動車株式会社　東京協同タクシー株式会社
AYA 交通株式会社　和親交通株式会社
杉並区立小学校 PTA 野球連合協議会
弁護士法人虎門中央法律事務所今井和男　（順不同　敬称略）

共催　読売新聞社　全国読売防犯協力会
　　公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会
特別協力　大庭泰三

パネルディスカッション

こんなことを子どもたちに伝えたい大人もいる！
～今は微力でも～

本誌記載の内容は全て無断転載を禁じます。

コーディネーター
竹花　豊　おやじ日本理事長　元東京都副知事
広島県警本部長時代には暴走族問題に取り組み、大きな成果を上げる。東京都副知事に就任後は、「歌舞伎町浄化作戦」の総指揮、都の青少年健全育成条例の改正などを行ない、一貫して青少年の非行防止、健全育成に関わっている。
現在、地域において学校と連携しながら子どもを育てるおやじの会を支援する「認定特定非営利活動法人おやじ日本」の理事長等を務める。
著書『子どもたちを救おう』（幻冬舎）

パネリスト
益子直美氏　一般社団法人「監督が怒ってはいけない大会」代表理事
中学時代からバレーボールを始め、高校時代は名門共栄学園のエースとして活躍。「イトーヨーカドー」チームに入り、エースとして活躍。1992 年３月　現役を引退。
自身の競技生活の経験から昭和時代の「怒る指導」は心の成長を阻止し、考える機会を奪うのではないか、根性がない！気合が足りない！と脱落させる指導ではなく、スポーツは楽しいと思え、自ら考え行動でき、継続できるような環境にしたいと考え「監督が怒ってはいけない小学生バレー大会」を開催。
2021 年、一般社団法人「監督が怒ってはいけない大会」を設立。
大会開催 11 年目。

パックンマックン　タレント
1997 年に共通の知人の紹介で知り合い、パックンマックンを結成。日米お笑いコンビのパイオニア。結成 26 年。
「爆笑オンエアバトル」で頭角を現し、「ジャスト」でお茶の間に浸透。現在は情報番組や英語にまつわる教育バラエティをはじめ、テレビやラジオ、イベントで活躍。
2003 年にはラスベガスで、2007 年にはハリウッドで英語漫才を挑戦。成功をおさめた。現在は講演活動も積極的に行っている。

山崎修道氏　東京都医学総合研究所　副参事研究員
1978 年福岡生まれ。大学院在籍中より、大学病院にて精神疾患を持つ当事者の方の就労・就学支援の実践に携わりつつ、精神疾患発症に関わる心理社会的要因の実証的な研究に従事。2012 年より大規模追跡調査「東京ティーンコホート」の立ち上げに関わり、現在まで継続。科学的根拠に基づくメンタルヘルス問題の可視化（見える化）と新たな支援モデルの検証・社会実装を進めている。

井内清満氏　NPO 法人ユース・サポート・センター「友懇塾」理事長
1988 年に非行問題を抱えた少年の立ち直りを保護者や学校と一緒に関わりながら支援している団体「友懇塾」を設立。
2003 年、NPO 法人ユース・サポート・センター「友懇塾」として認証され、本来の 24 時間電話相談を基礎に千葉家裁と協働した清掃活動や里山活動、深夜補導活動、防犯パトロール、薬物乱用防止活動など青少年の非行防止対策を中心に活動している。

池田利美　おやじ日本「未来教室」担当理事
パナソニック㈱で３８年間人事関係の仕事を担当。定年退職の翌年より、理事長とのご縁で未来教室を担当して１４年。
子どもたちのより良い未来に向けてのお手伝いができればとの思いで頑張っている。

布村幸彦　おやじ日本副理事長　元東京オリンピック・パラリンピック大会組織委員会副事務総長
2009 年スポーツ青少年教育局長としてスポーツ振興や体験活動を推進。2012 年初等中等教育局長として幼稚園から高校までの学力向上やいじめ問題に、高等教育局長として大学改革や飛び立て留学ジャパンなどに取り組む。2014 年 1 月から東京五輪パラリンピック組織委員会の副事務総長として東京大会開催に従事。

はじめに

竹花　皆さん、こんにちは。お忙しいところをこの大会に足をお運びいただきまして誠にありがとうございます。何とか今年もこのように大会を開くことができたこと、大変嬉しく思っております。多くの方々のご支援、ご協力を得ております。高い席からではございますけれども、本当に感謝を申し上げたいと存じます。

早速パネルディスカッションに移りたいと思います。昨年の大会にお越しになった方もおられると思いますが、昨年は子どもたちに大人はいったい何を、どのようにして伝えればいいか、学校現場ではどうだろう、家庭ではどうだろう、社会としてはどうすべきだろうということを議論いたしました。

その議論の中でどの方も共通して大事にすべきだという考え方が、子どもたちの主体性がしっかり育つように大人は接すべきだということでした。それは学校でも家庭でも同じではないか、それを大人はどういうふうにして子どもたちに伝えていけばいいのだろうかとあれこれ議論をしました。その中で、どうも子育てを人に委ねるという傾向が私たち大人の側になかったか。学校に任せておけばいい、お母さんに任せておけばいい、そういう考え方が父親にあったのではないかという反省もあったように思います。

やはり誰か任せにするのではなくて、それぞれの立場で何か自分でやれることをやっていこう。そして子どもたちにどんな困難な時代が来ても生きていける力をつけてもらえるように、大人としてメッセージを発していくことが大事ではないかということを話し合ったところです。

そこで今回はそれを少し発展させて、それではどんなことを大人はやっていくのかということについて、いくつかの事例を取り上げて議論していただきます。最初におやじ日本が十数年やっております「未来教室」です。企業の方々に学校に行っていただき、企業の実態、そこで求められる力を伝えることで子どもたちが自分の頭で、ああ、そうか、そういうことが大事なのかとわかってもらうための出前授業に取り組みました。11

もう一つは皆さんご存じの方も多いと思いますが、「監督が怒ってはいけない大会」です。始められて 11 年、さまざまな発展があり、また課題も残されていると聞いておりますけれども、このやり方は子どもたちにとってどんなものだろうというのが二つ目です。

三つ目は、厳しい状況に置かれた子どもたちに手を差し伸べて、その親たちにしっかりとしたメッセージを発していくことを長年続けてこられた方の経験をお聞きして、ああ、こういう子どもに対する接し方もあるんだ、大事なんだということをみんなで共有してみようじゃないかという、この三つの点をまず議論をしてみたいと思います。そしてそのあと、広く子どもたちが抱えている課題について、どうやって対処していけばいいのかということを議論してみたいと思っています。

そんなことでパネルを進めてまいります。お一人お一人今の段階では私はご紹介申し上げません。それぞれ発言のときに自己紹介をしていただくというかたちで進めたいと思います。

それでは最初のテーマ、おやじ日本が十数年結構苦労して進めてきた「未来教室」について、その責任者の池田さんにご説明をお願いいたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

未来教室

池田　おやじ日本で「未来教室」を担当しております池田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。ここに居られるほとんどの方は、「未来教室」についてご存知ないと思いますので、少し説明させていただきます。

未来教室とは一言で言いますと「小中学校のいわゆるキャリア教育の支援活動」で、さまざまな企業から講師を派遣していただき、子どもたちに働くというのはどういうことなのか、大人はどのように働いているかなどの働くということについての授業を行ってもらうという活動です。

スタートは 14 年前、2011 年 9 月で、今年で 15 年目になります。就職氷河期、リーマンショックなどを経て、当時学校を卒業しても就職しないとか、できないとか、就職してもすぐやめてしまう、ニートが増えるというという社会情勢の中で、小さいうちにキャリア教育を受けて

もらうことによって、少しでも状況を改善できるのではないかと考えて活動をスタートしました。

当時からキャリア教育の必要性は叫ばれていましたが、学校では進めたいと思っても、外部講師をどこに頼んだら来てもらえるかわからない、また、企業も社会貢献活動として教育支援を行いたいと考える企業も多くなっていましたが、ニーズがどこにあるかの情報がないために活動が進まないというそれぞれの課題がありました。そういった中で、我々が間に入り、お互いのニーズを結びつけることにより、少しでもキャリア教育を進めていけるのではないかと考えたものです。

とりあえずできる範囲でということで、都内の公立の小中学校を対象に開始しました。開始にあたっては、学校へもPRしないとニーズもわからないので、渋谷区の教育委員会の協力を得て、渋谷区内の小中学校を回ったり、おやじ日本の各メーンバーの学校との関わりや東京都の校長会、一部の区の校長会などでPRを行い、やりたいとの意思表示があった学校から始めました。以降は、口コミや経験した学校の校長や先生方の異動した先の学校からの要望などによって広がっていきました。

初年度、年間11回の授業でスタートし、徐々に増えてコロナの前には年間60回ほどの授業を実施しましたが、コロナで激減し、まだ回復途上にあると言っていいと思いますが、最近では年間30～40回という状況です。数字上は14年間で累計500回を超える授業を行い、受講してもらった生徒・児童の数も5万人を超えているという状況です。

この活動がどれだけ当初のねらいに沿って進んでいるのかは測れないのですが、授業の都度書いてもらっている小中学生の感想には、それぞれに感じたままの気持ちを書いてくれていますし、いろいろなことに気づいてくれ、また、色々なことを感じ取ってもらっているという感触は持っています。

また働くことについて、ネガティブなイメージを持っている子どもたちがいることも事実でありまして、その例を一つご紹介させていただきたいと思います。もう10年以上前になるのですが、ある中学校で中学1年生に対して授業を行った時のことでした。7月でしたので、中学に入ったばかりの子どもたちのクラスになります。

テレビ東京の女性の講師の方だったのですが、授業の冒頭で「皆さん、働くということについてどのようなイメージを持っていますか？」と質問したところ、しばらくシーンとした後で、一人の男子生徒が「面倒くさそう」と言ったのに続いて、「リストラ」、「上司の怒鳴り声」などのネガティブな言葉がいくつか続きました。

講師の方は驚いて、「大変なところに来てしまった。」と思ったそうですが、気を取り直して、予定していた話をし、その中で、「ガイアの夜明け」で使った映像で、年配の男性が発展途上国で現地のために活躍している姿を見てもらい、最後に、「さっきの〇〇さんが、生き生きと楽しそうに働いていると思った人？」と聞いたところ、全員が手を挙げてくれ、「授業をやって良かった！」と思ったと授業の後で話してくれたということがありました。もちろん全員でありませんが、やはり働くということについてネガティブなイメージを持っている子どもたちがいることも事実であり、この授業が、働くということをポジティブなイメージに変えてあげるきっかけになったのではないかとも思っております。

担当していただく講師の方々は、働くということや自分がやっていることについて、ポジティブなイメージで受け止めてもらえるような話をしていただける方が多く、授業を聞いている生徒・児童の表情などから、また、先生方の感想などからもある程度前向きにとらえてもらっているのではないかと思っています。何年も連続で依頼をしてくる学校や、異動した先からも依頼をしてくる先生方と話をしていますと、先生方には大変満足をしていただいており、それなりに意味のある活動になっているのではないかとは思っております。

講師を出していただいている企業側の対応としても、基本的に各企業さんは大変協力的です。企業側の大変協力的な対応という点で、やや極端な例になりますが、ひとつ JR 東日本さんの授業について、紹介させていただきます。

JR 東日本さんはこの活動の当初からご協力いただいている企業さんですが、今年の 2 月に荒川区の中学校で授業をやっていただいた時の事です。JR さんは通常でも複数名で来てくれることが多いのですが、この時は、今後のために見学したいという方も含めて 20 名程の方が来られました。

JR さんの窓口担当の方が調整してくれた結果ではあるのですが、運転手、車掌、駅員など日ごろ目に見える仕事の方だけではなく、保線、車両、信号機の担当の方などがそれぞれ「自分の仕事について話をしたい。」と希望されたということで、このようになったとのことでした。山手線が止まってしまうのではないかと心配になるような人数でしたが、キャリア教育の一つのポイントでもある「仕事は分業で行われていて、ひとつの目的に向かって、多くの人の協力や連携で成り立っている。」ということについて、そして、それぞれの講師の方が、自らの仕事に誇りとやりがいを持ってやっているということがとてもよく伝わ

る授業であったように思います。

JR 東日本さんに限らず、各企業さんそれぞれの企業の特徴を生かして、さまざまな工夫をしながら働くということ、また、世の中の動きなど、学校の先生方では教えることができない授業を行ってくださっていると思っています。いずれにしましても協力いただく企業さんあっての未来教室でありますので、各企業さんの協力には大変感謝をしています。

少し長くなりましたが、未来教室の取り組みの紹介とさせていただきたいと思います。ご理解いただけましたでしょうか。

竹花　ありがとうございます。山崎先生、いまのお話を踏まえてキャリア教育について何かご意見はありますでしょうか。

山崎　東京都医学総合研究所の山崎です。昨年度から参加をさせていただいています。私自身は若い方の、特にメンタルヘルスについて研究をしているのですが、いまのお話を聞いて非常に重要な活動だと思いました。2 点、すごく大事だなと思ったのは、いま、学校でそういうキャリア教育をされておられるということです。いまわれわれがやっているプロジェクトでも、先生ではない大人が学校に入って、学校の風土を変えていく。外から大人が入って行くことはすごく大事なことなのです。たぶんお感じだと思うのですが、学校では先生たちもお忙しくて、なかなか外から人を入れてくれない場合もあるのではないかと思います。そこを突破していただいたことは非常に意義のある活動かなと思いました。

もう一つは、若い方にとっては、お子さんもそうですが、お手本になるロールモデルが非常に大事で、そういうロールモデルが若いときにちゃんとあると、やっぱりその後大人になってからも自分でやる気を引き出したり、主体的に生きていける。これは科学的な研究でもかなり言われていることで、非常に重要な活動だなと思いました。

僕が伺っていて一番いいなと思ったのは JR 東日本の方 20 名もいらして、多様な仕事をされている方がそれぞれ説明してくださる。ロールモデルはただ一つだけというのはなくて、多様にあることが非常に大事だと思います。そういう活動はとても意義があると思いました。

せっかくの機会なので私から二つほどお聞かせいただきたいのですが、私は 3 人の子どもがいて、今朝キャリア教育を受けたことがある

か、どういう感想を持ったかと聞いてきました。うちの子が言っていたのが、企業の人が来てくれるのはいいんだけれど、もっとぶっ飛んだ大人が講師をしてほしいと。要するにクリエーターとか芸術家とか、また農家、漁師、ユーチューバーなどいろいろなロールモデルの中にはそういうクリエーター系の方もどんどん講師になってもらえると非常にいいのではないかということを言っていました。そういった余地がどのぐらいあるのか。いままで特に企業の方をメインにされてきたと思うのですが、そのへんはすごく大事かなと思います。

もう一つは、これはこういう分野だけに限らず我々メンタルヘルスの分野でもそうですが、若者を支援するサービスをつくっていくときに、若者自身に企画段階から入ってもらう。そこはすごく重要で、やっぱり大人が考えた若者のニーズはこれじゃないかと思うとだいたい外れるのです。なので企画段階から若い方が入ってやることはすごく重要ということは世界的にも言われています。そのあたりの取り組みをどうお考えなのか、お伺いしたいと思います。

池田　ありがとうございました。お答えになるかどうかわからないのですが、一つクリエーター的な仕事の方を講師にということでしたが、冒頭にも言いましたが、とりあえず始めましたのが、しっかり就職するように、企業に入るようになってもらいたいというところからでしたので、まずいまのところはほとんど企業の方に講師になってもらっていますが、今後は確かに言われるようにいろいろな仕事があります。企業さんの中でも、たとえばAmazonさんなどはかなりくだけた感じでお話をしていただいたりということもありますが、基本的には企業から来ていただく方ばかりですので、今後はやっぱりそういうところも満たして、学校側の要望なども聞きながら考えていけたらと思っております。

もう一つ、いわゆる企画段階から入ってもらうという点につきましては、いまのところ細々とこういった活動を続けているのが実態でありますので、なかなかそこまで行けるかどうかわかりませんが、ご意見として参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

竹花　ありがとうございました。池田さん、僕はいいことをしてい

ると自分でも思っているんだけれど、何で広がらないのでしょうか。それはだれが悪いのでしょうか。

池田　一番は二人で細々とやっているというところだと思います。コロナ前の年間 60 回ぐらいであれば、二人でやっていてもできるのですが、それ以上になりますとかなり体制も必要ですし、講師をしてもらう企業さんももっと増やさなければいけません。いろいろなことが必要になってきます。

竹花　それはおやじ日本の問題だとおっしゃるけれど、おやじ日本の問題と言うよりも学校の方の問題が大きいのではないですか。それはどうですか。

池田　それは私からどう言ったらいいのかわからないのですが。(笑)

竹花　じゃあ布村さんに答えてもらいましょう。

布村　皆さん、覚えておられますか。杉並区立和田中学校の藤原校長先生が中学校 2 年生で初めて地域の商店街とかに出かけて行った。あのころは文科省が「生きる力」ということを掲げて主体的で、対話的で深い学びを通じて働く力、生きる力を育てようと「体験の風をおこそう！キャンペーン」というのをやりました。小学校では自然体験活動、あるいはボランティア、そして中学校ではキャリア教育、職場体験ということで、それが一つのループになってかなり全国的に展開いただけました。

しかし反省を込めて言うと、その後は学力向上のほうに少しずつ傾倒して、体験の風の旗は降ろしてはいないのですが、文科省が別の旗も振っていたので、学校で職場体験が定着するまでには至らなかった。

特に何かと言うと、体験はしっぱなしではなくて体験を子どもたちの経験として経験化するという言い方をしていましたが、その次につながるように子どもたちに何か心の中に、精神的なものを残す、そういう体験の経験化をするためには体験活動をして見守る、そしてその経験化のために学校の先生だけではなくて企業の方、商店街の方、地域の大人の方々がフォローをして子どもの体験を経験化していく。本当に手間暇がかかることで、学校の先生方にもなかなかそれだけのゆとりがなくなったという状況です。反省を込めてそういうふうに感じています。

竹花　わかりました。今日のチラシにも「今は微力でも」と書いてあります。僕らがやっていたことは本当に大きな力にはまだなりきれていないということも事実ですので、皆さん方のご協力をいただきながらこの流れを少しずつでも大きくしていきたいと思っています。

ちなみにちょっとご紹介申し上げますが、いまお話しされた布村さんはおやじ日本の副理事長ではありますが、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の副事務総長でもありました。その経験をこの本に書かれました。これが皆さん方のところに入っていると思いますが、なぜ今回入れたかというと、この話の中心はパラリンピックです。今回パラリンピックを少しでも支援しようと、これまでもパラリンピックとはいろいろなかたちで深いかかわりを持ってきております。そういうこともありまして、今日は皆さん方にパラパラとでもいいから読んでいただこうと思って無料で入れておりますので、どうぞあとでお読みいただければと思います。布村さん、何かありますか。

布村　今日はおやじ日本の太っ腹で皆さんにお配りさせていただきました。私の気持ちとしては、パラリンピックから受けた衝撃とかパラの意義とかいろいろ考えることがあって、それを何とか皆さんにもお伝えしたいと思いました。またパラリンピックの選手村のマンガもつけさせていただいていますが、バリアフリーって何というのをわかりやすく、コロナだったので皆さんに選手村にも入っていただけなかったし、競技もご覧いただけなかった。またこれを伝えるには写真も撮ってなかったので、急遽マンガをつくったりしました。そういうパラに込めた思いを、あるいは経験をできるだけ多くの人にお伝えしたいと思ってつくらせていただきましたので、パラパラとめくっていただけるとありがたいです。

竹花　すみません、パックンマックン、お話しされたいのはよくわかっておりますので、ちょっとだけ感想をそれぞれ。

パックン　池田さん、大変有効な活動、お疲れさまです。やっぱり全国でやるのは会長がどんな無理なお願いをしても物理的に難しいですね。

マックン　でもみんながいい取り組みだと思っているから、もうちょっと声を大にすれば、これは全国的に広がると思いますけれどもね。

パックン　僕はキャリアに対する子どものイメージを植え付けるのは、学校で一日だけの体験とかではなくて、毎日親の姿、先生の姿、まちで出会う大人の姿から感じ取ることが大きいかなと思うんです。ですからキャリアに向けて前向きの子ども、その精神を形成するのだったら、みんなが日々努力しないといけないかなと思うんですよね。仕事は面倒くさいというのは、たぶん子どもも突発的に感じたものじゃなくて、周りの大人から感じ取ったものを反映していて言っているだけだと思うんです。僕はすごく恵まれたことで、毎日生き生きと楽しく仕事をしていますが、たとえばこのおやじ日本全国大会の仕事が入ったとき、マックンは面倒くさいと言っていたんだけれど。（笑）

マックン　言ってないよ！お前、なんで俺がマイクを持っていなくて発言権がないときにそういうことを言うの。（笑）

パックン　そういう大人が多いかなと思うんですよ。

マックン　言ってないからね。

パックン　日本のいいところは、すごく穏やかな精神状態で面倒くさいことでもみんな淡々とこなす。それはいいことですけれど、もう少し生き生き、ウキウキと楽しさを子どもに伝える努力を親も大人も日々やっていればいいのになと感じました。

マックン　僕は今日この会に声を大にして言いたいのは、みんなで討論しようと言っているのにマイクが 2 本しかない。（笑）

竹花　申し訳ありません。

マックン　発言したいときに発言できないという。

竹花　地声でやってください。

マックン　僕の場合は地声でも通るんで全然大丈夫なんですけれど。

うちは 23 歳の娘と下の子がいま高校 1 年生です。中学のときに、社会体験の学習があって、選択肢がコンビニ、スーパー、介護施設、釣り堀、保育園などでした。うちの娘はじゃんけんに負けて釣り堀になってしまいました。釣り堀で何の仕事をしてくればいいんだろうと言っていましたが、でも椅子を並べたり魚に餌をやって釣りやすくしたりとか、お父さん釣りが好きだけれど、釣り堀の人って、魚が釣りやすいように普段見えないところでいろいろ努力しているんだなというのがわかった、最初は期待していなかった分、楽しかった、そういうのが勉強

になったと言っていました。

竹花　進路は決まったの？

マックン　いや、釣り堀では働かないと思いますけれど、子どもたちが知らないことを体験して、それに興味を持つことは間違いないと思いますので、たとえば未来教室、先ほども言ったようにみんながこれっていいことだなと思っているので、本当に頑張っていただいて全国的にもっと多くの学校で体験できるように僕も希望しております。

パックン　ちなみにアメリカの場合は子どもを職場に連れて行く、Bring your kids to work という英語があるんです。

マックン　お父さんの職場に連れて行くんですね。

パックン　お母さんでもいいし、おじいちゃん、おばあちゃんでもいいんだけれど、その会社に遊びに行くんです。親の働いている姿を見学して、一緒に会議に参加したりする。子どもの教室を大人が見る父兄参観の逆みたいなかたちで、それもやっていいんじゃないかなと思う。

マックン　そうすると子どもが来るから今日はちゃんと働こうとか、そういうのもあったりするわけですね。

パックン　大人も楽しみ。

竹花　ありがとうございました。マイクが 2 本しかなくてすみません。(笑)

さておやじ日本が取り組んでおります未来教室、いろいろサジェスチョンをいただきましたので、池田さん、もうひと踏ん張りしますかね。よろしくお願いします。

池田　できる限り頑張りたいと思います。

監督が怒ってはいけない大会

竹花　さてお待たせをいたしました。益子さんの出番になります。益子さんの取り組みについてご紹介ください。

益子　はい、ありがとうございます。皆さん、こんにちは。益子直意と申します。一般社団法人「監督が怒ってはいけない大会」の代表理事、そして日本スポーツ少年団の本部長を務めております。監督が怒ってはいけない大会、今年 11 年目に入っていますが、まだまだ広まってい

ませんが、皆さんに質問していいですか。聞いたことがある方？　半分ぐらい。

マックン　僕はさっき初めて控室で聞きました。

益子　パックンマックンは初めて。

パックン　いや、僕は前からずっと。

マックン　絶対知らない顔をしてます。(笑) 27 年コンビをやっていますけれど、知らなかった顔をしています。

益子　そうですよね。バレーボールでパックンは盛り上げてくださっています。ありがとうございます。

11 年目なんですが、本当にまだまだ課題が多くあります。名前のとおり小学生のスポーツの大会で監督が怒ってはいけないというルールがある大会です。監督が怒ると×がついたマスクが入る。

マックン　発言権がなくなっちゃうんだ。

益子　そうなんです。ちょっと落ち着いてくださいということで、１セット分だけマスクしてもらうのですが、監督さんは怒っているつもりはないということで拒否される方が多いんですね。逆ギレされる方も多いんです。

私は監督のどういうところを見ているかというと、もちろん人格否定とかそういう言葉は減ってきていますが、何よりも子どもの顔を見ています。監督が言った言葉に対してその子どもがどういう反応をしているか、次にチャレンジできないように怯えてしまっていないか、挑戦をすることができなくなっていないかということを見ながら監督さんに注意をさせていただいたりしています。

何でもかんでも怒っちゃだめではないんです。ちゃんとルールがありまして、怒られることももちろんありますよということを子どもたちにも伝えているのですが、まずルール、マナーを守れなかったとき、これは怒られます。取り組む態度、姿勢が悪かったとき、みんな一生懸命やっているのにふざけてしまったり、そういうときは怒られます。またいじめ、悪口を言った時、危険な行為をしたときは監督、コーチ、大人の皆さんしっかりわかるように、子どもたちが理解できるように叱ってください、担当してください、介入してくださいということはお願いをしています。

もう一つ質問していいですか。私の現役時代を知っている方？　嬉しい。ありがとうございます。最近は引退して早三十数年経っていますので、もろ昭和世代で、「アタック No.1」にあこがれてバレーボールを始めて、「苦しくたって悲しくたって、コートの中では平気なの」という歌詞のとおり、苦しい、辛いというのはわかっていながらバレーを始めたのですが、それ以上でした。

中学 1 年でバレーを始めて、秋にレギュラーになった途端に監督から殴られるようになりました。ほぼ毎日殴られて、怒られて、止められたことはゼロです。本当に自信がなかったし、常にやめたいと思って、中 3 の夏休み前に 1 回やめています。私は本当に根性がない、スポーツには向いていないと思って、自分がだめだ、だめだとずっと思ってきていましたが、もう一度ご縁があってバレーボールに戻れたのです。

高校はもう絶対やめないという覚悟を持って春高バレーを目指して地元の葛飾区にある共栄学園に入ったら、さらにひどい。今日はカメラが来ているということで、ここだけの話、内緒にカットしてもらいたいのですが、最大殴られたのは往復ビンタ 21 連発というぐらい、ほぼ毎日殴られて怒られていました。

全日本にも選んでいただいたのですが、いまだから言えますけれど、全日本に行きたくない、レギュラーになりたくない、エースなのにトスを上げてほしくない、ミスしたら怒られる、殴られるとずっと思ってしまって、バレーボールがあっという間に嫌いになりました。プレッシャーしかない、スポーツは楽しむものではない、厳しくてなんぼという考えで来てしまっていました。社会人になっても早く引退したい、早く引退したい、逃げたい、これだけでした。

子どもたちにはとにかく楽しくスポーツをやってほしい。もちろん怒られてずっと頑張って来てやり通したという達成感と、春高バレーの準優勝、V リーグ優勝などいろいろ賞をもらったりした成績は残りました。でもそんな賞は全然うれしくなくて、自己肯定感はずっと低い、社会人になった途端に主体的に動け、自分で考えてやれと言われて何もできない。怒られないから楽チンだなと思って 1 年サボってのほほんとやっていました。やっぱり怒られないと、カツをかけられないと動けない人間になってしまっていたのです。

スポーツは自分から進んでこうなりたい、課題を持って頑張りたいと、そこが一番すばらしいツールのはずなのに、副作用のほうがすごく大きくなってしまっていたと思って、やっぱりスポーツの入口である小学生の大会では監督には少し怒るのを我慢してくださいということでこの活動を始めております。

現在は 11 年目。最初始めた時は、特にバレーボールの関係者には絶対ばれたくありませんでした。バレー界で怒ってはいけないなんてルールをつけた大会をやっていると言うと絶対怒られる。益子、何ばかなことをやっていると思われる。SNS にはまったく発信せずに活動していました。

でも 3 年目に部活で監督に怒られて自死を選んでしまった学生さんのニュースがあって、もう悲しくて、スポーツは命を奪うものではないという思いから、こういう大会をやっていますということを初めて発信しました。そうしたらツイッターに 200 通ぐらいメッセージが届きました。その 8 割が批判のメッセージで、お前もそうやって育ってきたんだろう、監督を裏切るのか、批判するのか、お前がそんな甘いことをやるから日本のスポーツ界はだめになるんだというメッセージがたくさんあってくじけました。

幸い仲間もいたので一緒にコツコツとできることをやっていこうということで、先ほど未来教室は 2 人と言っていましたが、うちは 3 人です。だからもっと人材がほしいと言えないなと思いましたが。(笑)いま 11 年目になってバレーボール以外にもバスケット、サッカー、ハンドボール、水泳、空手に広がって、今年は何と野球が大阪で開催が決まっています。

今日はおやじ日本の全国大会に呼んでいただいて、発表する機会をいただき本当にありがたく思っています。本当は全国のおやじたちに怒られる会なのではないかと思って、ちょっとドキドキしながら来ましたが、たくさんの方に聞いていただいて本当にありがたく思っております。ありがとうございます。

竹花　益子さん、私から一つ質問があります。益子さんに 21 回の連続パンチを食らわせたその方は、あなたに上手になってほしいというあなたに対する愛情からそうしたのではありませんか。

益子　そのときはそう思っていました。私がエースとしてだめだったからこれだけぶたれたんだとその時はそう思っていましたが、やっぱりトラウマのほうが大きいですし愛ではなかったなと思います。いろいろ学んでみて、やっぱり暴力は絶対心に残りますし、スポーツにおける監督、コーチの立ち位置は選手たちがいいパフォーマンスを出すために声掛けや指導をすることが一番なのに、私自身は大嫌いになってレギュラーになりたくない、トスを上げてほしくないという思いがすごく強くなってしまったので、愛とは思えないです。

竹花　大松監督の厳しい指導の下で女子バレーボールに金メダルをもたらしたというのは、多くの人はやっぱり厳しい練習をしなきゃ強くなれないんだなという印象を持たせていると思うんだけれど、それはどういうふうに考えますか。

益子　バレーボールって特に女子は東京オリンピックからずっとメダルを取り続けて強かったので、本当にああいうやり方が一番強くなる方法だという歴史がずっと長くありました。日本のほかは共産圏とか強いだけでヨーロッパや海外のチームはあまり強くなかった時代が多かったのですが、でもほかのアメリカとかヨーロッパのチームを見るとすごく楽しそうにバレーをやっている。私たちは本当にビクビクしながらやっていました。ほかのことを犠牲にして、視野がすごく狭くなっていて、ミスをして負けると、ああ、やっぱり厳しさが足りなかった、このワンマンレシーブを耐えれば次は勝てるんじゃないかとずっと思ってやっていました。

いま私たちのこの「怒ってはいけない大会」では怒りがなくても勝利と育成、両方手に入る指導方法が必ずあるはずなので、それを皆さんと一緒に探しましょうというのがテーマになっていて、それプラス厳しさです。東京オリンピックの当時からガンガン与えられてやる厳しさだったのですが、その厳しさをどうすればつくれるか。それが監督さんとしての腕の見せどころです。やらされるのではなくて、自分から主体的に動けるようなテーマを大会ごとにつくっています。

竹花　パックン、アメリカはどうなっているんですか。

パックン　僕も反論させていただきたいと思います。確かに東洋の魔女の時代はすごかった。僕もバレーボールをいまもやっているので

すが、当時の新しい技術のクイックアタックとかを生み出したのは日本の監督です。イノベーションで勝ったと言われます。でも当時の世界、オリンピックは8チームぐらいでした。8チームの中で優勝。それに比べていまの日本、トップ5とか10に入っている日本のほうが圧倒的に強い。当時の東洋の魔女にいまの日本の代表が対戦したら圧勝ですよね。

益子　そうです。

パックン　間違いないです。陸上競技の為末選手に以前対談で聞いたのですが、日本がスポーツで強くなって、世界のサッカー選手、野球選手、そしてチームスポーツも全部世界トップクラスになったのはスパルタ教育をやめたおかげです。格闘技もそうです。最近はテレビを見て強くなるし、教育や指導の仕方を研究したほうが圧倒的に強い選手やチームができるのです。昔の愛情を持ってビシバシ体罰を与えるから強いわけではない。あれでは弱かったのです。今のアメリカも愛情を持って指導することは指導しますが、走れ、走れとは言いますが、人格否定とかはしない新しいタイプの監督が主流派です。

僕は大学時代、ハーバード大学のスタメンセンターだったのですが、当時の監督は元トルコの代表選手で、すごい怒るタイプでした。普段から怒っているんですが、本気で怒るときはトルコ語に切り替わる。何を言っているのかわからないけれど、とにかく怒っていることが伝わる。僕らが4年生のときはIVYリーグで優勝して強かった。でもそのあと監督が替わって怒らない監督に切り替わってからハーバード大学は急に強くなって全国15位になりました。とんでもない成長ぶりを見せたのです。スパルタ教育をやめてからです。

アメリカはいろいろなスポーツを楽しむ文化であって、大人になってからもスポーツをやめることはなくて続ける国です。楽しくやるのが大前提で、楽しくなければやらなきゃいいというのが僕のスポーツに対する考え方です。

竹花　スパルタ教育をやめたら強くなる。スパルタ教育をやめると強くなるのはどうしてなんですか。

パックン　やりたくなるからです。自ら、ああ、失敗したな、落ち込んでしまうではなくて、失敗したら学ぼうと考えを切り替えればでき

るんです。

竹花　そうすると自分で取り組もうという主体性が出てくるわけですね。

パックン　結局主体性を育てるのがスポーツの意義であって、スポーツ以外のところでも、さっきおっしゃっていたキャリアとか、われわれが普段からやっている子育てとか、そういうところでも主体性を持って動けるようになるのがスポーツの意味なのです。みんながスポーツで強くなるのではなくて、人間として強くなるのです。

竹花　それは少し言い過ぎではないか、人間の主体性というのは本人が楽しくやれば生まれるというばかりではないだろうという思う方はいませんか。

マックン　僕は怒るのも必要だとは思うんです。僕も少年野球をやっていて、監督に怒られる、殴られることもあったんだけれども、それと同じ量を監督がほめてくれた。ヒットを打てばみんなで拍手して、監督が一番喜んでくれたり、優勝したときも一緒に泣いてくれたり、でも監督が怒ったときはこっちに何か問題があるんだろうなと生徒たちも考える。僕は完全にスパルタで良いことをやってもほめてくれない、ずっと怒りっぱなしというのはもちろんよくないと思うけれども、飴とむちではないけれど怒ることもあれば、一緒に歓びを分かち合うこともある、そういう指導の仕方をすればいいかなと思います。

パックン　マックンの娘もパフォーマンス系で一人がドラムで、もう一人がダンスをやっているんですけれど、その先生も怒っているの？

マックン　怒っていない。

パックン　でもうまいでしょ。

マックン　そうだね。

パックン　よし。

マックン　怒ることはないね。

竹花　今のマックンの話からほめるという言葉がありました。怒るの反対語でほめるというのがあるんだけれど、益子さん、ほめることは大事なことなんですか。

益子　そうですね。私自身は中学、高校で、自分のコーチ、監督から

ほめられたことがなかったのですが、ほかのチームの監督さんとかはすごくほめてくれるんです。でも全然うれしくないんです。やっぱりずっと見ていてくれている監督に認められたいという思いがあるので、なのでいつまで経っても自信がなかったのではないかと思っています。でもやっぱり認めてほしいし、喜んでほしいなという思いもあるのですが、私自身は怒ることとかほめることで人を動かそうと思ってこの二つをやってはいけないんじゃないかと思っています。

「怒る」と「叱る」

竹花　これはスポーツの話ばかりでしょうか。勉強だとか、あるいは生きるという側面で同じことが言えるでしょうか。

山崎　私たちも実は若い人が、たとえば親御さんからほめられるときにそのあとどういうふうにプラスになるのかという研究をしています。ただほめると一言で言うといろいろなほめ方があります。私たちが3000 人のお子さんとその親御さんを 10 年間追跡調査してきた研究からは結果だけをほめるというのは、実はあまりよくない。頑張ったことをほめるのはすごくいいし、自信にもつながることが分かっています。

また「怒る」と「叱る」は違う。怒るとき、僕も親なので怒ることがあるのですが、こっちに余裕がない。余裕がなくなってゆとりがなくなって、それでこっちの気持ちが不安になって怒ってしまうことがあります。叱るときは割と冷静なんです。やっぱりこれはいけないことだよねとか、本人も納得できるようなかたちでちゃんと伝えるというのが叱ることだと思うので、怒ると叱るでは、ほめ方も何をほめるのかがすごく大事だと思います。

益子　私はアンガーマネジメントのファシリテーターの資格も持っているのですが、監督さんたちにも試合の前の時間にアンガーマネジメントを受けていただきます。やっぱり怒るということは自分のリクエストを伝えるということですが、感情だけになってしまうと何も伝わらないんです。私を怒ってきた監督さんは自分の感情だけで怒っていて、だめだということだけしか伝わっていなかった。どうしてだめなのか、その理由が伝わっていなかった。相手の成長を願って怒る、リク

エストするということがすごく大事だと思っています。監督さんたちに試合の前にアンガーマネジメントを受けていただくと、試合中すごく頑張ってくださっています。

パックン　いまは自信を持てるようになったんですか。

益子　そうですね。私はこの「監督が怒ってはいけない大会」をやり始めた年に大学の監督をやっていたんですが、怒っていたんです。怒ってはいけない大会をやっているのに怒っていた。関東の 6 部リーグだったので、怒る必要はなかったのですが、ストレートで 3 部まで上がったら強くなってきて、私の指導力がなくなってどうしていいかわからなくなった。でもプライドが高くて学びに行けなかったんです。私の成功体験は怒られる指導しかなかったので怒ってしまったんです。怒りでワンマンレシーブとかやったときに、大きな声を出したり、強制してやらせたり、その結果、あっという間に学生たちの主体性がなくなって試合中に 1 本 1 本私のほうを見て答えを求めるようになってしまった。そこから本当に後悔でした。そこから学び始めました。

竹花　いまスポーツの話を中心にしていますが、益子さんからお話が出た自尊心の問題は、この大会でも何度も取り上げられてきて、いろいろなアンケート調査で日本の子どもたちが中国やアメリカの子どもたちに比べて自尊心が非常に低いということが指摘されています。そうすると、それはスポーツばかりではなくて日本の子どもの育て方、それは学校も家庭も含めて何かそこに一つ問題があるのではないかと感じるんですが、井内さん、いままでの話を聞いて、井内さんなりにどうですか、怒らないこと、自尊心の問題等、どんな感想をお持ちですか。

井内　いまいろいろお話を聞いた中で、指導する側がかなり真剣というか、遊び心のない、本当の意味の叱るというか、そういう気持ちでやっているような気がします。私も中学 3 年間は一度も楽しい思いをしたことがない。もしかしたら一度も笑わなかったかもしれない。毎日毎日、10 キロのマラソン、雨も嵐も晴れも。

益子　何の競技ですか。

井内　陸上です。私は陸上競技をずっとやっていました。毎日毎日駆け足をしていて、篠竹ってご存じでしょうか。竹の細いやつですが、自転車に乗った先生、監督から篠竹でお尻を叩かれる。それを 3 年間

やってきて、いまの私がある。その先生はその後教育長になられたのですが、そのお世話になった先生が亡くなった時、葬儀の最中に駆け付けて、棺に最後の釘を打ち込むその時間に間に合った。棺を開けてくれて、その先生と最期のお別れをした。私は厳しく教えられたけれども、飯食えとか、お前これやったか、あれやったかとか言ってくれたり、いろいろなところでほめてくれたりしていたので、先生に対する恨みはまったくなくて感謝一つ、そういう中学 3 年間でした。

私もよくいまの子どものことで話をするのですが、「叱る」と「怒る」は違う。怒るは感情、叱るは教育としっかり棲み分けしてやるようにといまは指導をしています。

竹花　ありがとうございます。マックン、感想はありますか。マックンもいままで叱られてきたんでしょう。いや、怒られてきたんじゃないですか。

マックン　もちろん怒られてきたし、うちの父親もまず手が出るタイプだったので、思いっきり殴られて顎が外れたこともあるんです。昭和です。でも僕はそこにも愛情は感じていたので、父親に対して恨みとかそういうものはもちろんありません。

いま「叱る」と「怒る」という言葉が出てきましたが、口けんかはお互いが怒っているから内容がまったく入ってこない。だから夫婦げんかとか 2 時間しても何でけんかしていたんだっけなと。結局結論も出ないし、仲直りも 2 日間ぐらい口を利かなくなってしょうがないから時間が解決するんですけれども、僕はあるときから怒らなくなって奥さんともけんかしなくなって、怒ることが無駄だなと思っています。夫婦げんかも 10 年以上していません。

パックン　そもそも顔も合わせていない。（笑）

マックン　そんなわけはない。別居しているわけじゃないんで、ちゃんと一つの家に住んでいますけれども、怒る前に一回考える。あとは二人が穏やかな時に「この間のこのときはこうだったので、あれはちょっとやめてほしいな」とか、こっちが意見をすると相手も「ああ、わかった」と理解してくれるし、逆に奥さんが「あの時はあれがすごい嫌だったんだ」、「あの言葉はちょっと嫌だったんだ」と言うと、「ああ、ごめんね」。怒っていないときこそ受け入れられる。だから「怒る」と「叱

る」の違いがすごいよくわかったのと、あとは怒って得はあまりないかなという感じがします。

パックン　僕はいつも娘に言うんです。娘は 16 歳で反抗期になってお母さんとすごい突っ張り合っているんです。僕とは仲がいいけれど、お母さんに対して何か汚い言葉を吐くと、その汚い言葉はお母さんも傷つけるけれど、自分の心も傷つけている。その汚い言葉を心の中に納めたくない。怒ったときはちょっと待って、冷静な言葉遣いをしよう、冷静な精神状態に戻ろう。例えば一回部屋を出なければいけないのならそうしてもいいけれど、落ち着いてから話したほうが結局自分の心をきれいに保てるんです。結構それを言ってから 3 年ぐらい経つのですが、全然聞いていない。

マックン　刺さってないんだね。（笑）

竹花　もう一つ聞いてみたいのですが、無視して叱らないというのはどうですか。無視すると問題は起こりません。だけど無視するという暴力もあるのではないですか。

パックン　無視するは、“neglect”という単語で、本格的に無視すると虐待として認定されます。

竹花　野球選手も何も言ってもらえないというのは寂しいですよね。

パックン　だから指導するのは大事です。正すのも大事です。でも怒っているじゃん、でも直しましたでいいんじゃないですか。

竹花　マックン、益子さん、どうでしょうか。

益子　怒られているほうがまだ無視よりもいいですよね。やっぱり声をかけたれない、目をかけられない、手をかけられないという無視が一番つらいと思うので、すべて怒ってはだめではないという大会なので、怒り方とか、怒って解決するのなら怒りたいですけれど、それではほとんど解決できないことが多いんです。

問題を抱えた子どもたちの支援

竹花　わかりました。ありがとうございました。またあと時間が余ればまたやってください。

次に手を差し伸べるということを長くやってこられた井内さん、あ

なたの取り組みの中身を少し説明していただけますか。

井内　ありがとうございます。私のことをほとんどの方は知らないと思いますが、今日は千葉県千葉市から来ました。「友懇塾」という NPO をやっています。カナダにユーコン川という川があります。そのユーコン川をカヌーで下ったときにこれほど人間を試す川はないということがあって、日本に帰って何か団体をつくるときにユーコンという名前をつけたいと思っていました。そしてこの NPO を立ち上げたとき、「ユーコン」の名前をもらって「友だちが懇談する塾」、「友懇塾」と名付けました。

私は平成元年、1989 年に非行少年の立ち直り支援にかかわり始めました。そこで子どもと話をしたり、全国から相談を受けたり、関東 5 県は問題が起きるとその日に車でその家まで出かけて行きます。ときには玄関から土足で家に入って行く時もあります。親父を蹴飛ばして、おい、何をやっているんだと親と闘ったりということも数多くありました。

平成 16 年から警察に捕まって家裁に送致されると、昔は試験観察と言っていましたが、いまは教育的措置というかたちで最終的に家裁に審判、あなたをこういう処分にしますよというその前の段階に、私のところに来ます。私は JR 千葉駅前で清掃活動をやっているのですが、その清掃活動に参加して、そしてその感想文を書きます。その感想文の中身を見て最終的にあなたをこういう処分にしますということになるのですが、いろいろな処分の中の一つだけのことでそういう子どもたちとかかわってやっています。子どもたちと私は常に仲がいい。子どもには一切差別をしない。差別をする大人も子どもも含めて、私はそういう人たちと闘っています。

千葉県には県有林があります。その県有林は 2.7 ヘクタール、2.7 ヘクタールって何坪でしょうか。

パックン　東京ドーム何個分とか言ったほうがいいんじゃないですか。

井内　なぜ私がこれを聞くのか。2.7 ヘクタールは 8,200 坪を超えているのですが、大人もこれを知らない。知らないのに、子どもに対して「こんなこともお前知らないのか」と大人は偉ぶる。だから私はみんな

知らないものは知らないんだ、だから別にいいじゃないかということを子どもに言って聞かせるということはできないのです。今はスマホがありますから 2.7 ヘクタールが何坪かすぐにわかります。こういうことを私は里山で教えています。

里山で山菜を採ります。私は調理師の免許も持っていますからその山菜でおいしい味噌汁を作ったり、炒め物をしたりして食べさせる。なぜそれを食べさせるかというと、子どもたちは普段コンビニで買ってきたものを食べている。夜 8 時ぐらいの閉店間際のスーパーに行くとお母さんたちがいっぱいいます。そこで私が買おうとすると、みんな私の手を止める。何だと思いますか。あと 10 分待ったら 3 割引きが 5 割引きの値段になると。それを買って家に帰って、皿に移さないで子どもに、「買ってきたから食べな」と。皆さん、夕食はだいたい 6 時～8 時が普通です。子どもが家に帰って食事をするのが夜 6 時過ぎです。値引きを待っていると 8 時過ぎ、これで幸せになれますか。

里山で自然観察し、子どもが感想文を書きます。山を歩くと何で土の道が軟らかいんですか、歩いている道が軟らかくて驚きましたとそういう感想文を書くのです。これってお父さん、お母さんがいろいろなところに連れて行っていない証拠です。こういうことを常に目にしています。

清掃活動はうちのスタッフも含めて大学生、協力者、警察、家庭裁判所の調査官、そして当事者とその保護者が参加して千葉駅前の清掃活動をしています。まちを汚しているのは全部大人です。だけどそういう大人が子どもに対して、今の子どもは気が利かないし、学校休むしなどと言っている。大人の責任はどこにあるのか。大人を叱る人が今いない。だから大人を叱るということはいかに大事かということを教えたいと思ってやっています。

先ほどパックンからアメリカの子どもの職場見学の話がありましたが、実は千葉県庁で一番初めにやっていました。何かと言うと、お父さんは家に帰ってくるとだらしないと思いませんか。疲れて帰って来て、だらしない格好のお父さんをいつも見て、お母さんが、「ほら、お父さん、こんなところでそんな恰好するんじゃないわよ。子どもの前で何をやっているのよ」とお母さんがお父さんを叱ります。だからお父さんが

働いている会社に子どもを連れて行って、子どもがお父さんのスーツを着て、ネクタイを締めて、電話をかけたりいろいろ働いている姿を子どもに見せるということをなぜやらないのか。働く姿を初めて見て「うちの父ちゃん、結構やるじゃないか」という信頼関係が取れるようになると思います。

こういうことも含めていまの社会は多くの方が自分勝手ですが、人のことを思ってやっていれば、そういうことをいろいろ思いついていくのですが、それができない。だからパックンが言ったように子どもを職場に連れて行ってお父さん、お母さんがパートや正社員で一生懸命働いている姿を子どもに見せてあげるということが大事だと思います。これをすることによって子どもは自分のお父さん、お母さんを信用するし、それから尊敬するようになるのです。だらしないパンツ一つで家にいるお父さんではないお父さんを見ることができるからです。そういうことを私はいつもやっています。

それからお母さん、お父さんの学力不足です。今日この会場にいらっしゃるのは元キャリアの方も含めて、皆さん大変立派な方だと私は思っています。だけど一番困るのは、できちゃった婚で、嫌いになったら子どものことはさて置いて、子どものことを心配しないで、もう嫌いだからとすぐに別れてしまう、そういう世界の子どもです。そういう大人の身勝手さを見ていると、どうしても私は黙っていられない。

子どもが学校から家に帰ってくると、「ほらほら、宿題をやりなさい、宿題をやりなさい」と言う。宿題をやりなさいと言うのはいいけれど、ではお父さん、お母さんは子どもに教えてやれるのか。俺そんなのわからないよと。小学校の勉強です。だから学校から帰ってきた子どもが宿題をやることができない。お金がある方は塾に入れるから、塾で勉強できる。だけど塾にも入れない、お父さん、お母さんが何も教えてくれない、学力の格差がどんどん、どんどん広がっていく。この広がっていくのを見ていると、何とかしてあげたいと思うじゃないですか。何とかしてあげたいと思うんだけれど、世の中の大人は立ち上がってくれない。

でもそれを助けてあげたいと思って、私のところには一時 38 人ぐらい、学校に行けなくなった子どもが来ていました。学校に行けなくなった子ども、あるいは少年院に行った子どもたちも含めて、こん畜生とい

う気持ちがない。いま大変残念なのが、今の子どもたちや若者の立ち上がりがなかなか難しいというのは、何かしら心の中に持っているのですが、それを吐き出す力がない。その吐き出す力を作ってあげることによって何とかなると思っています。

それから学校は子どもと上手なキャッチボールが苦手です。いま千葉のある高等学校で再任用で担任を持っている方は 75 歳です。教員のなり手がいないからです。

社会を震撼させるような子どもの事件もいっぱいあります。そういう子どもたちとかかわって、その子どもたちを見ていると私はどんな子どもも助けたいと思う。だから事件が起きて、僕は新聞でその記事を見た時に、その子が最終的にどこの少年院かわかりますから、必ず少年院に手紙を書きます。出てきた時に何か問題があったら俺が助けるから来いよということを書きながら、いまも活動をしています。

地域だってそうです。多くの人が地域で生活しているわけです。だけど地域のコミュニケーションはとれていますか。挨拶をしていますか。自分の家の前の道路に自分の家の葉っぱが落ちていると掃除をしろと役所に電話をする。こういう人たちが人間をつくり上げるための教育ができるかということです。私の家の裏にお店があるのですが、私は朝行って、その店の人が出勤する前にそのお店の土地の清掃を全部やります。それは私の家のものが落ちている可能性もあるから、だから私は清掃活動を全部やっています。

そういうことも含めていろいろなことにかかわれる優しい大人、優しい地域のおやじであると同時に、怖いおやじ、大人が大人を叱れるおやじ、こういうおやじになれる人をたくさんつくることで地域が明るくなって、地域がまとまって、そしてみんなが挨拶をできる、そういうコミュニティができあがる。私はそれを全部皆さんたちが悪ガキだと思ったり、迷惑をかけているような人たちから学びました。

自分の住んでいる家の隣に、あの子、いま少年院に行っているんだって、怖いわねということで地域行事に誘わなくなってしまう。そういう地域は暗くなる一方です。何かあったら助けるから何かあったら言ってと、そう言ってくれる大人がほしいのです。何でそれを地域でできないんだろう。何で地域にそういう大人が増えていかないんだろう。優し

いおやじがいて、怖いおやじがいてという世界ができあがってくるといいなというのが私の考え方です。

私は、さっき言ったパックンが言ったことを私のシナリオの中にもちゃんと書いていました。子どもに親の仕事を見せる。学校では父兄参観がありますが、それは何かというと、子どもの勉強している姿を親が見るわけです。だから大人がやっている仕事を子どもが見る権利があってもいいと思う。だからそれをやることが大事だということが私のシナリオにも書いてありました。

いま私がかかわっていて、今度もっと大きな問題となるのは不登校、あるいは引きこもりです。不登校は、3 日が勝負です。3 日で立ち上がることができれば勝てます。

また子どもと話をするときには同じ目線で話すことです。小学校の子どもも中学校の子どもも、80 歳、90 歳のおじいちゃん、おばあちゃんも同じ目線なのです。だからみんなと仲良くなれる。今日もここには私を知っている人も何人かいるのですが、皆さんと目を合わせて今日知り合ったということが私にとっては宝物です。またいろいろな話も出てくるでしょうから、とりあえず私の話はこれで終わりにしたいと思います。

子どもの問題と大人の姿勢

竹花　ありがとうございました。非行少年や問題を抱えた子どもたちにどう働きかけるのか。そして彼らから何を学ぶのかというお話がいま、井内さんからいろいろありました。今日ご参加の皆様の中にも少年補導にかかわっておられる方も少なくないと思います。いろいろ思うところもあるでしょうが、いまの井内さんの話で、その彼らに対する大人の向き合い方は、大人の姿勢が問われているということがキーだと思います。山崎先生いかがでしょう。

山崎　すごく貴重な話をありがとうございます。私自身も非行の若者というよりは、メンタルにかなりつらい体験をしてなかなか社会に出られなかった方の支援を、実は 10 年以上続けてきた経験があって、その話もすごく重なる部分があったので、本当にいい話を聞けたなと

思いました。

私が今パッと思ったのが、どうしても、たとえば非行のお子さん、また最近だと発達障害というものもありますが、周りの大人はどうしてもその子に問題があるのではないか、個人に問題があるのではないかと思ってしまいがちです。だけど実態はやっぱり周りです。環境がその子にとって非常につらい状況だから、そういう行動が出てくるということがあるわけです。それをずっとたどっていくと、周りの大人も子どものときにやっぱりつらい体験をしていたり、大人自身も逆境、つらい状況に置かれていて、そのお子さんに対してケアできない、孤立していることもすごくあります。だからわれわれは問題がある人に対して、たとえば主体性の話で言うと、主体性を出せとその人に言うのですが、主体性というのは主体性を出せるような環境に置かれて初めて出てくるものなので、周りの環境をどうしていくかということを本当に真剣に考えていかないといけないと私自身思いました。

竹花　パックンマックン、何か感想はありますか。

パックン　全然ふざけられない話だった。でも先生のご活動、ものすごく重要で、特に最近は少年犯罪は少年でも大人として裁判にかけて、大人として罰する傾向が強まっています。刑事責任は 16 歳、15 歳、14 歳とどんどん対象年齢が下げられて大人として責任を持たせるようにしています。そういう今の社会の動きが怖いなと思うんです。子どもは脳がまだ発達していない。ですからまだ大人じゃない。言ってみれば人間じゃない。ペットみたいなものです。いつも自分の子どもが間違った行為をとるときに怒るなよと自分に言い聞かせています。ペットがやって怒らないんだったら、子どもがやっても怒らないでおこうよと思うんです。

もちろん正す必要はあります。弁償や賠償する必要、更生する必要があるのですが、結局は大人として社会に貢献できるように少年院、もしくは教育機関、もしくは観察の中でその間違った行動をとった子どもを再教育、再育成しなければいけないと思います。もちろん被害者の感情もあります。社会の感情もありますけれど、最終的にはその子どもが立派な大人に育つように何とか軌道修正しなければいけないのに、いま罰する方向に重点が置かれているのをすごく懸念しています。先生

はその話、どう感じますか。

井内　言われるとおりで、その子の立ち直りを見守ることが必要ですが、皆さん、少年院を聞いたことがあるでしょう。少年院に見学に行ったことはありますか。

パックン　ないです。

井内　少年院に入っている子どもが、あと残り 3 カ月ぐらいになるとそろそろ仮退院で出院の準備もありますからお父さん、お母さんなど保護者に連絡をします。その時、こう言う人がいます。「その子は要りませんから好きにしてください」と。その子どもたちも就職させないといけないので私がその子に会うわけです。そうすると 99 ではなくて 100％嘘をつきます。「お前、これ嘘だろう」と言ったら、それで終わりです。「おお、そうか、そうか。そういうことだったらいいよ、いいよ。しっかりやろう」と話に乗るのです。そして就職の面倒をみるために就職先に連れて行きます。今度は 99 ではなくて 100％逃げます。逃げる理由は何かわかりますか。自分の親が俺を捨てた、本当に捨てたかどうかを確認に行くのです。子どもはかわいそうだと思いませんか。確認に行って初めて、ああ、俺はここには居場所がないんだといった時に、自分の部屋はきれいに片付いて、今までとは違うお父さんがいたりしている。そうするとどうするかというと、そこからなけなしのお金で私のところに電話をかけてきます。「俺、わかる？」「どうしたんだよ。お前、逃げたんだろう」と言う。そこから話をして、「お金はあるのか？」「ない」「わかった。じゃあすぐどこどこの交番に行け。交番に俺が電話しておくから、交番でお金を借りろ」と。お金を借りるのは、そこから私のところに来るまでの交通費です。私は交番にお金を振り込みます。それを一回経験すると、今度は子どもの立ち直りがそこからぐっと向かっていきます。

ここには会社経営の方もたくさんいらっしゃると思いますが、会社経営の人に絶対お願いしたいのは、仕事が終わったら、仕事のことで子どもを絶対叱らないということです。子どもは仕事が終わったら、「今日は楽しい話だな、お前、今日はよかったな。今日はどこかに遊びに行こうね」と仕事と遊びというプライベートな時間を完全に切り離す。そうすることによって子どもは絶対に立ち直ります。これが秘訣です。

私は子どもたちと月に 1 回、夕食を一緒に食べに行きます。そして会社に何か問題あるか、社長に何か言いたいことはないか、仲間とうまくいっているのかなどいろいろな話を聞きだします。そこで聞いたことを私は会社に行って全部話をしています。そうするともうここは 99 ではなく 100％私を信用してくる。信用してくるともうその子は絶対に悪さをしなくなる。だから人間はそこまでかかわってあげないと立ち直り支援は難しいということです。

竹花　井内さん、ありがとう。

マックン　ただただ普通に聞いているだけで、僕が思っていたことをパックンが投げかけてくれたのと、結論で言うと人の愛情がすごく重要なんだなと思いました。あとさっき近所づきあいの話なども出ましたが、うちはなるべく近所の人とコミュニケーションを取るようにしています。いまの人は、パックンのところももしかしたらやっていないと思うけれど、家族で旅行に行く時は、隣の家に声をかけます。うちは今日から 3 日間いないのでお願いしますと言うと見守ってくれるし。

パックン　空き巣が入ったら隣の責任。

マックン　いや、そんなことはない。（笑）近所に声をかけて、たとえば子どもが鍵がなくて家に入れないときも、近所のおじさんがうちでお茶を飲んでいなさいと助けてくれる。それは僕らが近所の人とコミュニケーションを取っているからです。いまは挨拶をしない世の中になっていますが、コミュニケーションを取ることによって近所で助け合うことができる。だから僕もうちの子もそうだし、近所同士愛情があるから何となくコミュニケーションが取れています。

でもいろいろ話を聞くとやっぱり愛情がなかったり、親に嘘をつかれたり、親に見捨てられたりということで、やっぱり子どもも傷ついてだれも信じられなくなる。でもその中で立ち直ることができるのは、やっぱりだれかの愛情で、それが知らない人でも自分を思ってくれる人がいるんだということを発見できれば人間は立ち直れるきっかけがつくれるのだなということをお話の中から感じ取りました。

パックン　井内さんみたいなおやじが近所に一人ずついればいい。

マックン　そういうことだね。

パックン　マックンが目指しているのは杉並区の井内理事長。

マックン　そうですね。

竹花　ありがとうございます。井内さんは本当に子どもたちに大人として愛が大事だということを真剣に思って伝えている。そういう大人として子どもたちと信頼を持って、その子どもたちの社会に戻ってくる手助けをしていらっしゃるのだと思います。井内さんとおやじ日本は長い付き合いですが、こういう方と私どもはお付き合いをしていることに、私どもとして誇りを感じております。井内さん、これからも頑張ってください。よろしくお願いします。（拍手）

父の日に

竹花　さて、そろそろもうあと 30 分になりました。父の日が来週 15 日日曜日です。父の日というと目につくのはプレゼントばかりです。これは違う。父の日というのは、父のあり方を考える日だと思います。そういう父親の皆さん方に考えてほしいことを含めて、子どもたちにどういうふうに接することが大事だと思うか、皆さんの思うところを少しお聞きしたいと思います。子どもたちをめぐってはいろいろな問題があると思います。いまの井内さんのお話のように家庭に問題があって、子どもたちが行き場を失うというご家庭もあるでしょうが、家庭はしっかりしているけれど、子どもたちが不登校になったりするご家庭もあります。その原因はさまざまでしょうが、たとえばスマホの問題、たとえばオンラインゲームの問題だったり、さまざま子どもたちを取り巻いている問題があろうかと思います。そういう問題も含めて家庭の中で親が子どもたちにいろいろな課題にどう向き合うのか、それをどのように伝えるのか、思うところをお話しいただければと思います。まず布村さん、何かご提案はありますか。

布村　もう 10 年以上前ですが、文部科学省で仕事をしていたその反省を踏まえて、先週話したのですが、そのころ学力低下の問題があって、学力向上の対策はずいぶんいろいろやりました。その結果一定の水準は保たれるようになりました。しかし学力が向上するとどうしても相対評価につながってしまう。全体の中の評価が低くなるからと、そういうテストを繰り返すと、できない子どもたちはいつもマイナス評価

されてしまい、それがいま子どもたちの自尊心がなかなか育たない、自己肯定感が育たないということになる。

ではどうすればいいのか。益子さんの「監督が怒ってはいけない大会」の話を伺い、千葉県柏で相撲少年団を指導していらっしゃる永井さんともお話をしたのですが、お二人に共通するのが、子どもたちの自主性をスポーツの世界でいかに育てるかということで、やはり自律性が大事だということです。

話は飛びますが、大谷選手とかサッカー、バレーボールでもいま世界的に活躍する選手が明確な目標を立てて、そのために自分は何をすべきか、そういう自律性を持って計画的に自分の人生を歩む、そういう若い世代の人がいっぱいいる。そういういいロールモデルがスポーツの中でも芸術の中でも育っています。親がサポートをしながら、夢が見つけられないときには、あなたは何をしたいのか、どう生きたいのか、そういう問いかけをしなければいけない。そういうことを永井さんとも話していたのですが、いまの井内さんの話を聞いていて、軽いな俺はと思って反省していました。

実際、井内さんの顔がだんだん大谷選手に見えてきたんですけれど、共通性があって、やはり自分をしっかり持っていらっしゃって、自律性がしっかり確立されているから人がちゃんと見えていらっしゃる。そして自分で動いて、自分で環境をつくっていらっしゃる。お酒が好きな方ですが、24 時間飲まないで電話がかかってきたらすぐに車を飛ばして現地に駆け付けるという話を以前伺いました。さっきもどなたかがおっしゃっていましたが、全国の地域に井内さん配置計画がやれるといいのですが、率直な感想ですが、今日の発表を聞いてそんな感想を持ちました。

竹花　ありがとうございました。池田さんどうですか。

池田　特に大したコメントはないのですが、おかげさまでうちの子どもたちは何とか元気にすくすくと育っています。いま孫を見ていますと、時代が変わったなといろいろ感じています。先日も孫の学校公開日で見に行ったのですが、タブレットが配られていて、授業のしかたが昔とまったく変わってしまっている。こういう環境で子どもたちはどういうふうに育っていくのか、いままったくわからない状況です。幸い

孫たちも日ごろは楽しく明るく接してくれていますが、苦労されている子どもさんもいらっしゃる。親たち、大人たちが頑張っていかないといけないなということを今日改めて感じさせていただきました。

竹花　井内さん、父の日に父親に対してこう考えろということがあればメッセージをお願いします。

井内　父の日にということですが、最後に一つだけ言わせてください。わが子が小学校 4 年まではお母ちゃんのおっぱいの味とお母ちゃんの体のにおいをいやになるほどハグしてかがしてください。だんだん大きくなると子どもは必ずもうお母ちゃんやめてよと言いますから、それは子どもが脱皮して一つ大人になる境目です。小学校 4 年までがその子の将来をつくります。これは私が 36 年間やってきた中の結論です。一生懸命に大人が頑張れば、一生懸命にみんなが頑張れば、そしてみんなが差別しなければ、きっといい家庭といい社会が生まれます。

竹花　ありがとうございました。益子さん、いかがですか。

益子　いまいろいろなお話を伺って、どんな大人に出会うのかがすごく重要だと思います。うちはすごく貧乏だったのですが、親にすごく感謝しています。私がこうやって子どもたちのために何かやれとだれかに言われたわけではありません。怒ってはいけない大会の前は LGBTQ、ゲイの方たちのバレー大会を 10 年やっていて、10 年終わったところで子どもに切り替えました。その前はパラリンピックのシッティングバレーボールというスポーツのボランティアをずっとやっていて、シドニーのパラリンピックに出るまでサポートしたりしていました。別にだれかにやれと言われたわけではないのですが、そうやって自分のできることを手伝うということが自然に身についていたなと思っていたのですが、それは何でかよくわかっていませんでした。

とある大学教授の研究対象に私がなって、子どもの頃のことを掘り下げて思い出しながらインタビューされた時に、一つ出てきたのが、東京でも葛飾区の下町なので、ホームレスの方が結構いたんです。その中におきんちゃんという名前のホームレスの方がいて、月に 1 回か 2 回ぐらい各家庭を回って「何かないかね」と助けを求めて来る。うちの父も母も居合わせたときは必ず、「直美、そこの戸棚にお金が入っているから渡して」とか、「そこにお菓子があるからこれを持たせて」とか、

そうやって必ず何かを渡していました。学校に行くと、そのおきんちゃんの話題になるのですが、本当にうちにも来るの、いやだよねとか、そういう話をしているご家庭のお子さんが多かったのですが、でもうちはおきんちゃんに大事に接していました。そういう両親をずっと見てきていたのかなという思いもあったりして、すごく尊敬しております。

私は中学のときにバンバン殴られても、親を悲しませたくなくて殴られたことを親に一回も言っていませんでした。手の跡をつけて帰っていたので、たぶんわかっていたと思うのですが、娘のできが悪い、だからお父さん、お母さんは悲しんでしまうなと思って、いやだとか、殴られたことを絶対に言えませんでした。時代がどんどん変わってきて、働き方や環境、ルールなどいろいろなものが変わってきていますが、やっぱり近くにいる大人の皆さんが子どもとどうかかわるか、すごく大事なんだなと感じました。そして何か子どもたちにとって一筋の光になりたいと改めて思いました。

竹花　ありがとうございます。マックン、よろしくお願いします。

マックン　父の日、どういう父であるべきか。ちょっとした自慢話をしてもいいですか。うちの娘が将来お父さんみたいな人と結婚したいと言ったんです。そうしたらうちの奥さんが無理だねと言う。何でと言ったら、世の中にこんないい人いないよって言ってくれたのです。こんないい人、見つかるわけないでしょと言って、娘もそうだよねと言った夫婦関係、僕はそれを言ってくれた奥さんに感謝するし、奥さんがそれを娘に言ったことでお父さんはいい人なんだなと。その夫婦関係、家族関係もこれからずっと続けていきたいなと思います。そういう家族が理想なのかなと思います。

竹花　非常にいいお話だったと思います。そういうお父さんを目指してもらいたいと思いました。パックンはどういうお父さんを目指しますか。

パックン　僕は実は母子家庭で育ちました。7 歳のときに両親が別居をして 8 歳のときに離婚が成立して、最初は隔週に 1 回、その次は月に 1 回、その次は半年に 1 回ぐらいしかお父さんとは会っていませんでした。ずっと仲良くはしています。たぶんおやじは僕を失いたくないから会うたびにアイスクリームを奢ってくれたり、乗馬やボーリング

など楽しいアクティビティを用意してくれたりして、いまだにお父さんとすごく仲がいいし感謝しています。

自分の父にもちろん会いたかったけれど、父が近くにいなかった間にも、実は第二の父みたいな大人も近くにいました。僕は本にも 5 人のお母さんの話を書いているのですが、本当のお母さん、近所にいたお母さん、教会で知り合ったお母さん、大親友のお母さん、いろいろなステージでそれぞれすごくお世話になっています。本当のお母さんとけんかして家に帰りたくないときは、近所のお母さんの家に適当に入って冷蔵庫を開けて何か食べて、ソファに寝ていても受け入れてくれて全然問題はなかった。日本に来たときも北陸で知り合った仲間のお母さんにずっとお世話になったことも本にも書いています。

実はそれぞれのお母さんに旦那さんもいました。本には書いていないんだけれど、温かくてずっしりしている怒らない男が各家庭にいたのもすごく心のよりどころとして助かっています。自分の父がいなくても学校頑張っているか、スポーツで新聞見たけれど賞を取ったって、偉いね、よかったねと。だから僕は自分のお父さんみたいな、息子に対して温かいお父さんにもなりたいですが、ほかの方の子どもに対しても温かくて優しい、支えるような、みんなのお父さんにもなりたいなと思って、父の日に 5000 本ぐらいの電話がかかってくる日が来るといいなと思っています。

マックン　まだ 1 件も来ていないでしょう。

パックン　自分の子どもも覚えてないぐらいです。いずれはそうなってほしいなと思います。

竹花　いいお話です。ありがとうございました。山崎さん、お願いします。

山崎　ありがとうございました。父の日で、どういう父親として子どもに接するべきかということですけれども、今日井内さんのお話を伺って、本当に父親としてすごく心に響いたお話だったなと思いました。

ここに来る前にうちの娘と妻にどういう父親だったらいいだろうかと聞いてきたんです。井内さんがおっしゃったこととすごく重なっていて、まず一つ娘からは、自分ができないことは言うな、注意するなと

はっきり言われました。お父さん、歯を磨かずに寝ているときがあるじゃない、私にそんなこと言わないでと。主体性の話でも主体性を出せと子どもに言うのは一番よくなくて、大人が主体的に動くのを見せて、それで子どもも主体的に動いてくるというようになると思うので、まず大人ができないことは言わないということはすごく大事だと思いました。

もう一つは、妻に聞いたのですが、妻として父親にどういうふうになって欲しいかと言ったら、母親はどうしても心配になってチャレンジを止めてしまうことがある、だけど父親は結構後押しをしてくれる、それがすごくいいと言われました。やっぱり主体性を育んでいくうえでは試行錯誤の経験がすごく大事です。お母さんは心配します。一人でやっていて大丈夫みたいなときに、大丈夫、大丈夫、ケガをしても何とかなるからという感じで構えていくことがとても大事だと思いました。

最後に私たちの研究とかかわるところでは、いま学校に外から先生ではない大人を派遣して生徒さんの主体性を発揮してもらって、学校をどんどん居心地をよくしていくというプロジェクトをしています。居心地がよくなるとメンタルヘルスの問題だけではなく、いじめや校内暴力も激減することが科学的にわかってきています。それを東京中に広めようとしています。

そのときに大事なのは、主体性が育まれるときには自分の考えをきちんと言えて、それはどんな考えであっても 1 回受け止められて、それをもとに現実が変わっていく。変わっていっていい経験が自分に戻ってくるとなるとすごく主体感が出てくるということがあるのです。なので井内先生は非行少年が最初 100％嘘をつくとおっしゃいましたが、それでも井内先生のようにそれを本気で信じることはすごく大事だと思います。こちらがそんなこと嘘だろう見たいな感じで言うと、もう信頼関係は崩れてしまい、最初の一歩を閉ざしてしまうと思います。子どもなりにそういうことがあったということを 100％受け止めるということはとても大事なことだと思って今日はお話を伺いました。ありがとうございます。

竹花　それでは最後に今日の感想とこれから自分自身が努力をしていこうということなども含めてそれぞれ 1 分ずつお話しいただけますでしょうか。順番は布村さんから順次行きますのでよろしくお願いします。

布村　ありがとうございました。一言、もう 70 になって言う言葉ではないのですが、大人を叱れる大人になりたいなと思いました。

話は飛びますが、パラリンピックで学んだことを一つだけ。障害って何と言われて、最初はその人が足が不自由とか、耳が聴こえないとか、その人の問題ではないということを学びました。突然全盲の方のクラブに行ったと仮定してください。目の見える人がそのクラブに入って、ある程度暗いところでもあって、この人は点字が読めないのにこんなところに来ているよ、じゃあ点字を読める補助者、介助者をつけましょうかとそんな対話が研修の時にありました。要は環境、社会が障害をつくっているので、その人の問題というよりはそれを受け入れる社会が問題だ。そういったことをパラで学んだので、関係ないかもしれませんが、本にそんな趣旨のことも書きました。

池田　ありがとうございました。今日は子どもたちとのかかわり方についていろいろと考えさせていただきました。未来教室をいかにさらにより効果のあるものにしていくかということももちろんそうですし、私個人としても孫たちに対しても、未来教室の子どもたちに対してもやっぱり大人としてきちんとした姿を見せることを意識しながらやっていければと思いました。ありがとうございました。

井内　今日はどうもありがとうございました。小学校、中学校の子どもの不登校が 34 万人と言われています。全国のおやじ、全国の母ちゃんが一生懸命に子どもたちにかかわりながらやっていると 34 万人が来年はどれぐらい減るかなと思います。こういう子どもたちを助けるために全国のおやじ、頑張ってください。

益子　今日はありがとうございました。「監督が怒ってはいけない大会」を始めたときは 10 年でやめると決めていました。もう必要ないと言われたいと思い、10 年目標だったのですが、11 年目に入ってしまい

ましたが、また違う別のリーグ戦をセカンドステージとして立ち上げてスタートしました。「もうそろそろ必要ないよ。益子さん、ゆっくりしてください」と言われたいなと思っています。でももう少し時間はかかるかなと思っています。

今日こうしておやじの皆様たちの活動を聞いて、ぜひつながっていただいていろいろな年代、いろいろなジャンルの方たちと一緒に、ともにスポーツだけではなくて社会を明るくして整えていけたらいいなと思いました。おやじ日本ならぬ、熟女？おふくろ？ずっと言葉を考えているのですが何も浮かばなくて、もしいい言葉があったらぜひつながっていただけたらうれしいです。今日は本当にありがとうございました。

マックン　今日僕が勉強したのは、「叱る」と「怒る」は違うこと、あと叱るという言葉にはたぶん愛があると思ったことと、僕の中では愛情が中心になっているかなと思います。

去年もちょっと話したのですが、僕はいま子ども食堂の料理人もやっています。子ども食堂は全員が平等だから不登校の子も来ますし、裕福な家庭の子も来ますし、ご飯に困っている子も来る。でもだれがどういう関係性かわからない。だから不登校の子もそこなら学力とか何も比較されないし、ただ単に料理がおいしいから食べに来る。この子ども食堂には大人の愛情がすごく注がれているので、僕はこれを今後も続けていきたいと思っています。

先ほども言ったように僕は「叱る」と「怒る」は違うことを勉強したので、僕も子どもを怒りたいとき、怒るのではなくて叱ることを意識して、また大人同士でも今後は向き合っていければいいかなと思いました。ありがとうございます。

パックン　僕らはこの会に 6 回目でしょうか、毎回毎回楽しくて勉強になるなと思います。先生方はすごい活動をされていますし、もうこんなにいい人はいない、理想だと思います。皆さん、ぜひおやじって完璧じゃないところもわかっていただきたい。たぶんこのおやじたちもみんな毎日苦戦していると思うんです。

僕は子どもが生まれたときは、スーパーベイビー、スーパーキッズ、スーパー大人に育てようと思っていたんだけれど、全然思う通りには

いかない。当時卓球の愛ちゃんが泣きながら練習に励んでいる 5〜6 歳の姿を見て、うちの子どもも同じように泣きながら卓球少女に育ってほしいと思っていたんだけれど、ちょっと泣いてすぐにやめる。泣かすまでは行けたけれど、卓球が好きになるまではできなかった。すごい失敗したなと思ったけれど、そのあとバレーボールが好きになって、いま一緒にやっています。だから全然違うところに花が咲き、芽が生える。結局自分の想定外の生き物として育てていくのが今楽しくなってきています。いっぱい失敗しているのですが、子どもはそれなりに何かおもしろい、僕が想像していなかった人間に育ったのを見て、メッチャ楽しいです。

年末にアムステルダムとロンドンに子どもを連れて行って、年越しダンスパーティに行ったり、ツアーに参加して船に乗ったり、終わったら娘に何が楽しかったかと言ったら、ダンスパーティで知り合ったトルコ人の娘とすごい仲良くなって、いまインスタの友だちになった、よかったと言っています。息子に何が一番楽しかったと聞いたら、無理に話ししなくていいんだよと突っ張っている。でもそれもまたおもしろいなと思っています。8 歳の息子と突っ張り合っているこの関係も、たぶん 10 年経ったら恋しくなるぐらいかもしれない。だから毎日何か挑戦して、毎日ちょっと心配するのもおやじの道です。この険しい道、想定外の道も皆さん楽しんでいただきたいと思いました。

山崎　今日は本当にありがとうございました。もういろいろ話したのですが、明日から実際にやってみたいなと思ったことが二つあって、一つはぜひ職場に自分たちの子どもだけではなくてみんなの子どもも連れてくる日をつくってみたいと本当に思いました。もう一つは、父親が怒ってはいけない日もつくってみようかなと。ちょうど父の日にそういうふうにしてみてもいいんじゃないかなと思います。どうしても怒らないといけないのではないかというところを、実際ちょっと止めてみて、ああ、これでもうまくいくんだというのを体験するのもすごく大事かなと思ったので、その二つはぜひやってみたいと思いました。

竹花　皆さん、ありがとうございました。まだ言い足りないこともあろうかと思いますが、時間がまいりました。今日もずいぶん勉強をさせていただきました。課題を抱えた子どもたちに対する対応に苦労さ

れている井内さんの話を久しぶりに聞いて、昔のことを思い出して感激をしました。

私の今日のディスカッションの感想は二つあります。一つは、益子さんがやっておられることも、池田さんがやっておられることも、いままでの枠を、あるいはいままで当然だと思っていたことを変えるチャレンジ、新しい試みです。ですからいろいろな困難があったはずで、あまりはっきり言わなかったけれど、未来教室の場合は学校という閉鎖的なところをどう広げていこうかという大きな壁がありました。しかしいったん始めてみると悪くないなということで受け入れられ、徐々にながらそれが広がっている。益子さんがやっておられることも同じだと思います。体罰、体罰という中でもうちょっと枠を広げて子どもたちに対する接し方を考えてみようと、これも大きなチャレンジだったと思います。そういう従来の常識を変える取り組みに対して私どもは何かどこかで躊躇するところがありがちですが、この二つの取り組みはそこを切り開いてきた。またこれからもっと広がってくることを本当に期待したいと思います。

もう一つは、やっぱり世の中の子どもに対して大人の本気度が大事だと思います。パックンもよく茶化しますが、内心はやっぱり本気があります。大人が本気になって子どもたちのよりどころとなっていることの大切さを今日も改めて知ったと思います。

皆様、それぞれお感じになったことをこれからの皆様の人生、あるいは子どもたちに向けての活動に活かしていただければと思います。

本日はありがとうございました。

（2025 年 6 月 7 日）

おやじ日本のあゆみ

２００４年　・おやじ日本設立宣言
平成１６年　・「総監督」に星野仙一氏と野村萬斎氏が就任
・おやじ日本全国大会及びおやじ東京全都大会　6 月 27 日（日）
基調講演「おやじ、頑張ろう！」　講師：星野仙一氏
パネルディスカッション「おやじ、知ってくれ！」

２００５年　・おやじ日本全国大会及びおやじ東京全都大会　6 月 26 日（日）
平成１７年　基調講演「気づかせて育てる子どもの力」講師：山口良治氏
パネルディスカッション「子どもが安心して、いきいきと育つ地域とは」

２００６年　・おやじ日本規約制定
平成１８年　・83 運動推進開始 協力：(株)電通ＣＳＲ室社会貢献部
・おやじ日本全国大会及びおやじ神奈川設立大会　6 月 11 日(日)
全員参加型パネルディスカッション
「子どもと地域の為に、おやじ汗をかこう」
パネルディスカッション「おやじ！知ってくれ」
～携帯電話に翻弄されない子どもを育てよう～
・豊橋おやじネットワーク発足

２００７年　・携帯フォーラム・イン千葉　3 月 4 日（日）
平成１９年　「おやじ！知ってくれ～子どもと携帯～」
・おやじ日本全国大会及び千葉おやじネットワーク設立大会
6 月 3 日（日）「～広げよう、千葉おやじの輪～」

２００８年　・おやじ日本発「ｉＳ運動」推進開始
平成２０年　「おやじ宣言～立ち上がれ！おやじ」発信
・おやじ日本全国大会及び埼玉おやじネットワーク設立大会
6 月 1 日（日）「～広げよう、埼玉おやじの輪～」
第 1 部　「立ち上がれ！おやじ～子どもを守るおやじの輪～」
第 2 部　パネルディスカッション　「ケータイの今～ケータイは危険？あなたはどう考える～」

２００９年　・特定非営利活動法人おやじ日本設立　（2 月 9 日法人登記完了）
平成２１年　・特定非営利活動法人おやじ日本設立記念大会 6 月 7 日（日）
「世界のおやじ、日本のおやじ。～語ろうじゃないか、子どもへの思い～」於：渋谷 CCＬｅｍｏｎホール
・おやじ日本山形発足　4 月 11 日（土）

２０１０年　・おやじ日本しまなみ設立準備会　1 月 16 日（土）
平成２２年　・第 7 回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会　6 月 20 日(日)
「おやじたちの争点－公教育のあり方をめぐって（学校五日制、塾、部活ｅｔｃ。）－」
・おやじ日本広島設立記念大会　7 月 14 日（日）
・第 8 回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会山形大会
11 月 6 日（土）第一部：講演「育てたように子は育つ」
パネルディスカッション「未来を開く子供たちをどう育てるか」
・第 33 回渋谷区くみんの広場参加

２０１１年　・第 9 回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会　6 月 5 日（日）
平成２３年　「学校は社会の変化に対応できているか。そして親は…-おやじ日本の問題提起-」
・「未来教室」（学校と企業との連携支援）実施開始　実施校 11 校
・第２回おやじ日本広島大会

２０１２年　・第４回愛知おやじサミットｉｎ大口　1 月 28 日（土）
平成２４年　「おやじの子育てー子どもも育つ、おやじも育つ、地域も育つ人づくりー」
・国税庁長官より認定特定非営利活動法人に認定される。
（認定日 6 月 4 日）
・第 10 回認定特定非営利活動法人全国大会　6 月 24 日（日）
「未来教室」へのお誘い～キャリア教育を広げるために～
・「未来教室」（学校と企業との連携支援）実施校 21 校
・第３回おやじ日本広島大会　11 月 25 日（日）

２０１３年　・第４回おやじ日本広島大会　4 月 13 日（土）
平成２５年　於：三滝グリーンチャペル　東日本大震災復興チャリティーコンサート「千の音色でつなぐ絆」
・創立 10 周年記念全国大会　6 月 30 日（日）
「広がれ！おやじの輪～語ろう子どもたちと～」
ヴァイオリン（東日本大震災復興支援～ヴァイオリン・プロジェクト「千の音色でつなぐ絆」～津波で流失した陸前高田のマツや建材から作られたヴァイオリン）演奏
総合司会　早川信夫氏（NHK 解説委員）
第 1 部　「広がれ！おやじの輪～おやじの汗に乾杯！～」
・おやじ日本広島　「子どもたちに感動を」　・豊橋おやじネッ

トワーク「地域へもっと足を運ぼう」
・大子自然塾　「自然体験を子どもたちに」
・おやじ日本山形「学校へ出かけよう」
・おやじ日本「未来教室～学校に社会の風を吹き込もう～」
第２部　「これから　～日本の子どもたち～」
基調講演　ダニエル・カール氏（タレント）
パネルディスカッション　ダニエル・カール氏　他
・第２回おやじ日本山形大会「未来ある子どもたちのために」
11 月 30 日（土）
・「未来教室」（学校と企業との連携支援）　実施校 35 校

２０１４年
平成２６年
・第６回おやじ日本広島大会　４月６日（日）
・東京都公立小学校長会意見交換会　５月 13 日（火）
・東京都公立中学校長会意見交換会　５月 27 日（火）
・第 12 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
６月 29 日(日)　「災害国日本の親、おやじに問われていること」～助けられる人から助ける人へ～
基調講演/パネルディスカッション「災害国日本の親、おやじに問われていること」～助けられる人から助ける人へ～
コーディネーター　早川信夫氏（NHK 解説委員）
・世田谷区立等々力小学校おやじの会創立２０周年祝賀会
７月 20 日（日）　於：世田谷区立等々力小学校
・千葉県市原市青少年育成ちはら台地区民体験講演会
９月 20 日（土）　於：ちはら台コミュニティセンター
・「未来教室」　実施校 53 校
・「防災教室」11 月 12 日（水）於：渋谷区立原宿外苑中学校

２０１５年
平成２７年
・第 13 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
６月 27 日（日）「スマホと子どもたち～スマホどうする、おやじ！考えようじゃないか～」
基調講演　「スマホ時代の大人が知っておきたいこと」
講師　竹内和雄氏（兵庫県立大学環境人間学部准教授）
基調講演　「今子どもの心に何がおきているのか」
講師　小野和哉氏（東京慈恵会医科大学准教授）
パネルディスカッション
コーディネーター早川信夫氏　(NHK 解説委員)
パネリスト　ダニエル・カール氏（タレント）他
・第７回おやじ日本広島大会　フットサル大会　10 月 25 日（日）

・「未来教室」　実施校 48 校
・ｉＳ運動推進「スマホ安心・安全教室」
・防災教室推進

２０１６年
平成２８年

・埼玉おやじネットワーク講演会　「スマートフォンが与える青少年への影響と対策」　2 月 21 日（日）
主催：上尾市青少年育成連合会　原市地区会議
・第 14 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6 月 26 日（日）「パラスポーツの未来～結構深いぞ　障がい者スポーツ！～」
基調講演　「知っていますか？　パラスポーツ」
講師：仲前信治氏（公益財団法人日本障がい者スポーツ協会強化部強化支援課課長代理）
デモンストレーション「ウィルチェアーラグビーはおもしろい！」
デモンストレータ　小川仁士氏（「ＢＬＩＴＺ」埼玉所属
パネルディスカッション「結構深いぞ　障がい者スポーツ」
コーディネーター　竹花 豊（おやじ日本理事長）
パネリスト　田口亜希氏（パラリンピアン・射撃）
小川仁士氏（「ＢＬＩＴＺ」埼玉所属）
長谷部健氏（渋谷区長）内田賀文氏（パナソニック株式会社パラリンピック統括部長）他
・豊橋おやじネットワーク　おやじフォーラム 2016
11 月 22 日（火）　竹花豊理事長講演会
11 月 23 日（祝）栄おやじの会西居院慰問　廣中顧問見舞兼
・「未来教室」　実施校 49 校

２０１７年
平成２９年

・「未来教室」　実施校 59 校
・第 15 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6 月 25 日（日）「パラスポーツの未来Ⅱ～パラスポーツから元気をもらおう！～」
基調講演　「冬季パラリンピックがやってくる」
講師：大日方邦子氏（日本パラリンピアンズ協会副会長）
デモンストレーション　「やってみよう　ボッチャ」」
協力　日本ボッチャ協会　都立光明学園生徒
パネルディスカッション　「パラリンピアン大いに語る！」
コーディネーター　早川信夫氏（NHK 解説委員）
パネリスト　上原大祐氏（NPO 法人 D-ShiPS32 代表）

大日方邦子氏（日本パラリンピアンズ協会副会長）
ダニエル・カール氏（タレント）
長谷部健氏（渋谷区長）
マクドナルド山本恵理氏（日本財団パラリンピックサポートセンタープロジェクトリーダー・パワーリフティング選手）

・第３回おやじ日本山形大会（第１６回全国大会）「これからの時代を生き抜く子どもたちのために」11 月 18 日（土）

２０１８年
平成３０年

・第 17 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6 月 24 日（日）パネルディスカッション　「18 歳はもう大人！？」
総合司会　宮本 隆治氏（アナウンサー）
インタビュー　「日本の内と外を語る」
パックンマックン（タレント）
小山 裕介氏（コントロール・リスクス・グループ（株）日本総代表兼シニア・パートナー）
マクドナルド山本恵理氏（日本財団パラリンピックサポートセンタープロジェクトリーダー・パワーリフティング選手）
「私たちはこう思う！」　東京都立日比谷高校生　　東京芸術大学音楽部附属音楽高等学校生　　慶応義塾大学生
「大人たちにも言わせてほしい！」
長谷部健氏（渋谷区長）　武内彰氏（東京都立日比谷高校校長）長坂敏文（おやじ日本監事　十文字学園女子大学名誉教授）他

・「未来教室」　実施校 59 校

２０１９年
令和元年

・認定ＮＰＯ法人おやじ日本設立１５周年記念大会（第 18 回全国大会）「さてどうする？令和のおやじ　～社会の変化とこれからのおやじ～」6 月 23 日（日）
パネルディスカッション　「さてどうする？　令和のおやじ　～社会の変化とこれからのおやじ～」
司会　三宅 民夫氏（元ＮＨＫエグゼクティブアナウンサー）
メインスピーカー パックンマックン（タレント）
長谷部　健氏（渋谷区長）
長谷川　真理子氏（総合研究大学院大学学長）
竹花　豊（おやじ日本理事長　元東京都副知事）
登壇者　エドバーグ・ヤコブ氏（実業家　スウエーデン）
ノラ・コットマン氏（家族人類学者　ドイツ）

きらら弦楽合奏団メンバー　オール世田谷おやじの会
横浜市立川和東小おやじの会　掃除に学ぶ会　張晶子氏
スコーレ家庭教育振興協会会員
杉並区立小学校 PTA 野球連合協議会会員
・「未来教室」　実施校 58 校

２０２０年
令和２年
・第 19 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会延期
（コロナ感染拡大の影響の為）オン/オフライン勉強会実施
・「未来教室」実施校 10 校

２０２１年
令和３年
・第 19 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6 月 27 日（日）「AI は人間を幸せにするのか？　子どもたちと考える」
基調講演「Ai の“今”と“これから”」
講師：西垣通氏（東京大学名誉教授）
パネルディスカッション　コーディネーター
三宅民夫氏（元 NHK エグゼクティブアナウンサー）
パネリスト　西垣通氏（東京大学名誉教授）
長谷川眞理子氏（総合研究院大学院大学長）
工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校）
パックンマックン（タレント）
長谷部健氏（渋谷区長）大学生
・「未来教室」　実施校 30 校

２０２２年
令和４年
・第 20 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6 月 26 日（日）「子どもに対する大人の責任を果たすために～自信を持った子どもを育てよう」
基調講演「子ども対する大人の責任を果たすために
～自信を持った子どもを育てよう～」
講師：工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校）
パネルディスカッション
パネリスト　長谷川眞理子氏（総合研究大学院大学学長）、
工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校長）
布村幸彦（おやじ日本理事・元文部科学省初等中等教育局長）
村内敦（おやじ日本理事・オール世田谷おやじの会会長）
コーディネーター
竹花豊（おやじ日本理事長・元東京都副知事）
・「未来教室」　実施校 37 校

２０２３年
令和５年

・第 21 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6 月 25 日（日）「コロナ禍と子どもたち～どうする？おやじ、大人！～」
パネルディスカッション
「オープニングインタビュー（ビデオ出演）
パックンマックン（タレント）
コーディネーター
竹花豊（おやじ日本理事長・元東京都副知事）
パネリスト
山口有紗氏（医師　子どもの虐待防止センター）、
大字弘一郎氏（全国連合小学校長会会長）
宇都宮啓（市原市青少年育成ちはら台地区区民会議会長）
村内敦（オール世田谷おやじの会会長）
石橋昌祐（杉並区立小学校ＰＴＡ野球連合協議会会長
佐々木淳氏（前杉並区立和田小学校おやじの会会長）
羅悠飛さん（高１）中山梨華さん（高２）
石野絢香さん（高２）垣内ひな子さん（中２）
長谷川優貴さん（中３）中澤悠依子さん（中３）
・「未来教室」　実施校 39 校

２０２４年
令和６年

・第 22 回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
（設立 20 周年記念大会）
6 月 15 日（土）「子どもたちに対する大人の責任～父の日に考えてみよう～」
基調講演「未来に通じる教育へ」
講師：工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校前校長）
パネルディスカッション
コーディネーター
竹花豊（おやじ日本理事長・元東京都副知事）
パネリスト
工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校前校長）
パックンマックン（タレント）
山崎修道氏（東京都医学総合研究所　副参事研究員）
山田正也氏（上尾市原市おやじの会会長）
村内敦（オール世田谷おやじの会会長）
石橋昌祐（杉並区立小学校ＰＴＡ野球連合協議会会長
・「未来教室」　実施校 28 校

２０２５年　・第23回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
令和７年　　６月７日（土）「こんなことを子どもたちに伝えたい大人もいる！」～今は微力でも～
パネルディスカッション
コーディネーター
竹花豊（おやじ日本理事長・元東京都副知事）
パネリスト
益子直美氏（一般社団法人「監督が怒ってはいけない大会」代表理事）
パックンマックン（タレント）
山崎修道氏（東京都医学総合研究所　副参事研究委員）
井内清満氏
（NPO法人ユースサポートサンター「友懇塾」理事長）
池田利美（おやじ日本「未来教室」担当理事）
布村幸彦（おやじ日本副理事長　元東京オリンピック・パラリンピック大会組織委員会副事務総長）
・「未来教室」実施校４校（７月現在）

【発行】認定特定非営利活動法人おやじ日本
住所　〒150-0043
東京都渋谷区道玄坂1-２-３　　渋谷フクラス１７階
電話　　０５０－２０１７－３２３１
ホームページ：http://oyaji-nippon.org/
E-mail：desk@oyaji-nippon.org
編集　　京須和恵　小山洋子
編集協力（株）シップ
発行日　2025年8月

本誌記載の内容は全て無断転載を禁じます。